



～ 情報と支援 ～

管理者 金田 紘和

昨年度末に“支援の現場での好事例”を共有する機会として“利用者の方とのこれまでを振り返る”といった内容の研修を行いました。研修を担当したスタッフは生活介護事業所プルスペースが初めて働く福祉の現場であり、強度行動障害を有する方々と過ごすことになって感じた気持ちや、しっかりと向き合い関係性を構築してきた支援について自分の言葉で表現してくれていました。利用開始前まで遡り、利用に至った経緯や利用開始当初から見られてきた激しい自傷行為や他害行為といった行動面、泣きや叫ぶような声出しといった情緒面へのアプローチ、2年間で共に過ごす中で活動場面や曜日、時間ごとの課題とそれらに応じた支援が現在の生活に繋がっているのだと改めて共有する機会となりました。

誤解を恐れずに言うのであれば、障がい福祉において行動障害を有する方々との関わりについて“怖い”という感覚は何よりも大切なことと考えています。それは利用者の方“個人”を怖がるといった意味合いではなく、“知らないこと”への恐怖のことです。

福祉サービスは一般的に相談支援事業所が窓口となって、サービスを受けたい(利用したい)方の情報のやり取りが行われることが多く、事業所は利用を希望されるご本人に会うより先にその方の自傷行為や他害行為、物品の破壊や走り出しといったこれまでの大まかな情報を受け取ります。その情報に触れた時には「〇〇を怪我させてしまい…」、「〇〇を壊してしまい…」といったインパクトの強い部分にだけ焦点が行きがちになりますが、私たち支援者は“誰に対して”、“どのような環境下で”、“どういったタイミング”に行動が表出してしまったのか、その行動の目的とその時の支援体制についてのできるだけ詳しい情報に目を向けなければいけません。

例えば“誰に対して”といった内容だけでも“ただ近くに居た人”なのか、“特定の人”に対しての行動であるのか、“他者に向かっていた行動を制止しようとしたスタッフ”であるのか、支援者が知っておくべき情報に限りはありません。事業所として事前情報の周知と共有を行うことに加えて、他利用者の方と共に過ごす為の支援の想定といった準備を怠ることなく利用者の方と過ごすことが大切です。そして実際の活動を通して事前情報の精査、実際の行動やその時の表情、本人の持つ能力、得手不得手、コミュニケーションの手段等、1つひとつのアセスメントを重ねていくことが利用者の方々と関わる支援者たちの務めだと考えています。



～ 梅雨入り ～



九州南部の梅雨入りが発表されました。6月と言えば1年の折り返しの時期であり、4月に様々な生活の変化があった方々も新しい環境に慣れてきている時期でしょうか。プルスペースでも支援学校を卒業したばかりの方がいらっしゃいますが、先輩の利用者の方々と過ごす活動に馴染んでいられている様子です。

梅雨の時期だけではありませんが、高温多湿の気候は身体にとって負担も大きいと考えられます。室温管理や水分補給に気を付けながら元気に活動を続けていきたいと思います。



(有) 万葉堂
生活介護事業所
プルスペース

